

2 【あやかし】

その日（【あかなめ】にあってから、三か月後のある日）懐爺はたぶん昼寝をしていたのかもしれない。

なかなかでてこなかったので、死んでいるのかとおもっていると、でてきたときは笑顔でした。

「せつないのう」

ぼくはいいました。

「やっぱり、おばけですか」

懐爺はききました。

ぼくが泥鰌（どじょう）をすくいに、小川にいったときに、そのおばけは、あらわれたのです。

途轍（とてつ）もなく長いもの。

あんまり長すぎて、どこが頭でどこが尻尾（しっぽ）かわからない。

かたちは、鰻（うなぎ）そっくりなのに、目とか口がないので、よけいに不気味（ぶきみ）でした。

口がないくせに、変な声をあげている。

ふひよ

ふひよ

ぶぶぶひよ

「くわれるかとおもうたけど、くちがないもんで、たすかった」

「金ちゃんは、小川のほとりで、釣りしていたんでしょ。【あやかし】は、船を沈ませるおばけですから、大丈夫ですよ。それとむかしから〈百鬼夜行（ひゃっきやこう）〉といいましてね、あかるいうちにでてくるおばけは、こわくありません」

懐爺は、やさしくなぐさめる声で、いいました。

「いつだったか、金ちゃんが生まれる前ですけど。鰻の仕掛け作りのために、夜おそく大川で小舟にのっていた、村の大人が二人、【あやかし】に、舟を沈められた。泳ぎの達人（たっしや）な二人だったけれども、ういてこなかったし、遺体（いたい）もみつからなかった。【あやかし】に、くわれてしまいましたからね」

「ふたりは、わるいひとだったんか」

ぼくは、いちおうきいてみました。

「わるい人でなくても、おばけにはやられますよ。でも【あやかし】にくわれたのは、鰻をとりすぎたせいかもしれないと、噂（うわさ）されたものですよ。とっていいけど、とりすぎてはいけない。大川に、鰻が一匹もいなくなりますからね。金ちゃんも、泥鰯をとりすぎないほうがいいです」

ぼくはそれからは、泥鰯すくいも魚釣りも、いっさいやめました。

いまでもけっしてやらない。

そのあと懐爺は、身振り手振りで、こう蘊蓄（うんちく）をのべたのです。

「おおむかしはね、おばけをみんな、【あやかし】とよんだもんですよ。たとえば、嫉妬（しつと）にくるった女が、大蛇に変身するのも【あやかし】、うらみがつのって、鬼になって人をくうのも【あやかし】、龍（りゅう）や蜘蛛（くも）にばける【あやかし】もいる。おぞましい物語の中心には、かならず【あやかし】がいるんです。ただこのごろは、おばけもいろいろ、たくさんになってしまって、【あやかし】で総称（そうしょう）するわけには、いかないもんですからね」

「せつないのう」

ぼくはいいました。

「おおむかしの物語には、おばけがよくでてきます。『日本霊異記（にほんりょういき）』はもちろん、『今昔物語（こんじゃくものがたり）』、そうそう、『源氏物語（げんじものがたり）』にだって」

「あの、げんじとへいけの、げんじかい」

ぼくはいちおう、ききました。

「それは『平家物語（へいけものがたり）』ですが、まあこのさい、どちらでもいいです」

「このさい、かい。せつないのう」

「おおむかしの言葉で語ると、もっとせつないものです」

懐爺はいつて、もちろんぼくには意味不明の、何か呪文（じゅもん）らしいものを、諳（そら）んじます。

「むかし、まなごのせうじがむすめ、くまのまうでのやまぶしを、おもいかけ、ねがはくは、みづからに、おもひを、とげさせてたまへと、も

うしければ、かのやまぶし、それ、そくもんのみなれば、しゃくもんにいりて、ひとにしゆつりののぞみ、なをこそおもわれ、だいがわんを、くわだてん。やまぶしは、かねまきでらにはしりいり、たすけてたべとのたまへば、りつし、とりあへず、かねのしたへ、いれける、かのむすめ、かねのもとへたつねきて、にはかにだいじゃとなつて、かねをまき、おおかに、にえいりけり」

ふいに鼓膜（こまく）にひびく、いやにすごい音がしました。

龍かとおもったが、祠の奥の竹藪が風に鳴ったのでした。